

新進研究者 Research Note
理由のために行為することと実践的推論
Acting for Reasons and Practical Reasoning

中根 杏樹

Abstract

“Practical reasoning”, has been considered as indispensable for acting for reasons. Is this claim right? This paper deals with this question. In addressing this question, it should be noted that practical reasoning has two aspects: aspect as an act of mind and aspect as a propositional structure. I seek to answer the question positively from both aspects by developing Velleman’s view. In my opinion, practical reasoning as an act of mind is that an agent take one’s action to be supported by promises. As far as we describe our action in terms of our end, we act for reasons in virtue of practical reasoning.

(1) 研究テーマ

「実践的推論 (practical reasoning)」は、「理由のために行為する」ことの必要条件に関わると考えられる。本稿の研究テーマは、実践的推論である。

(2) 研究の背景・先行研究

なぜ、理由のための行為を説明するために、「実践的推論」について考えることが助けになるのだろう。それは、理由のために行為するとき、行為者は、その理由から為すべき行為を導き出している、と考えられるからだ。「なぜ彼に道を教えていたの?」「道が分からず困っていたから、助けようと思って」。この例では、「道を教えることが彼を助ける手段であるがゆえに、当該の行為を行うべきである」という行為者の思考が示されている。「理由」は日常的に「根拠」とも言い換えられるが、この例では、その目的と手段が根拠となって、行為を為すべきものとして導いている。なんらかの命題を根拠として結論を導くことを「推論」と言うのだから、理由のための行為は実践的推論と切り離せない関係にあると考えられる。

この関係を捉えて、アンスコムは、特定の行為において、特定のことがらが理由であるのは、手段—目的、部分—全体の関係を表すような実践的推論

の前提として働く場合のみであると主張する (Anscombe, 1957, pp.79-80; 150-152 頁) i. 他の論者もこれに同意し、デイヴィドソンは、欲求と信念が当該の形式をとって行為を惹き起こすとき、それらの欲求と信念が基本理由となると考えていた (Davidson, 1963, p.5; 5 頁) .

この見解は妥当だろうか. われわれは理由のために行為する際、つねに実践的推論にもとづいて行為を導いているのだろうか. この問いが、本稿の中心的な問いとなる. だが、この問いは、実践的推論が様々な側面を有するために、答えるのが難しい. 実践的推論には心的側面と非心的側面がある. 一方で、実践的推論は、行為者の、為すべき行為についての思考であると考えられる. しかし、他方で、実践的推論は、前提を根拠に別の行為を結論づけるものであると考えられる. 根拠づけるという関係は、人の心理ではなく、その内容である命題に由来するから、この側面においては、実践的推論は命題的構造であると考えられる ii. 実践的推論には二つの側面があるため、当該の問いには幾つかの答え方がある. 本稿は、両者の関係を緊密なものとして理解し、両者に関して肯定的に答えたい.

理由のための行為がつねに実践的推論にもとづくかという問いを考えるうえで筆者が焦点を当てたいのは、実践的推論の他の諸側面である. これはあまり意識されない点であるが、その役割に関して、実践的推論には二つの側面がある. 一方で、実践的推論は行為を為すのがよい、役立つポイントを示す (Anscombe, 1989, p.114; 199 頁). 他方で、実践的推論は行為の記述にかかわる. 意図的行為はなんらかの記述のもとで意図的である. 先の例では、当該の人物の行為は「人助けをする」という記述のもとで意図的であるが、「空気を振動させる」という記述のもとでは意図的でない. この行為記述に関して、実践的推論は、行為の記述が有する秩序であると考えられる (Anscombe, 1957, p. 80; 152 頁) iii. この点は問題ではないと思われるかもしれないが、実践的推論の心的側面についてどのように考えるかを左右する.

本節の残りでは、心的側面に関する議論を紹介する. (3)節では、そこで紹介された D.ヴェルマンの見解を発展させるという仕方で、理由のための行為がつねに実践的推論にもとづくかという問いに答える道筋を示したい.

さて、実践的推論の心的側面とはどのようなものだろうか. 実践的推論は為すべき行為を導くような思考であると述べた. われわれはときに、「何を為すべきか」という問いに答えるという目的をもって、行為の創案、結果の想像といった多様な思考を行う. 実践的推論とは、このような、「何を為すべきか」の問いに答えるという目的をもって行われる心的行為であると考えられるかもしれない. ここから、理由のために行為するときには、事前にこうした

心的行為を行っているのだ、という単純な見解が導かれる。

この単純な見解はアルパリーらの反論に直面する。彼らは、心的行為であるような自発的な思考を「熟慮(*deliberation*)」と呼ぶ^{iv}。彼らは、熟慮が心的行為であるという事実をもとに、先の単純な見解（事前熟慮説）を批判する。

彼らが指摘するのは、無限後退の問題である。熟慮はそれ自体が心的行為である。そうすると、事前熟慮説によれば、その熟慮のための事前の熟慮が行われていたはずである。熟慮のための熟慮もそれ自体が心的行為なのだから、その熟慮のために事前の熟慮が行われていなければならない。こうして、事前熟慮説は無限後退に陥る（*Arpaly and Schroeder, 2012, pp.219-220*）。

このような考察から、彼らは、熟慮説には見込みがなく、理由のために行うことは、非自発的な過程によって可能だと結論づける（*ibid, p.230*）。アルパリーらは、論文の最後で、「理由応答は関連する異なる態度間の〔…〕論理的関係のゆえに生じる心的状態の移行以上のものは必要としない」のであり、それは因果的な移行であると述べている（*ibid., p.238*）。

さて、アルパリーらの論証を受け、彼らとは異なる方向で展開したのがヴェルマンである。彼は「実践的推論」の記述を与えるという役割に目を向け、これを自発的な心的行為、熟慮ではなく、非自発的な思考として理解する。彼によれば、実践的推論とは、行為中を通して、行為が意味をなすことを保証する思考である^v。彼の説明では、それは、行為中に行為を監督するという役割を担う。実践的推論は、「行為が意味をなすものであることを保証する」という監督役割を「行動の流れを行為概念の下に置く」ことによって果たす。行動を行為概念のもとに置くとは、たとえば、指を動かすという行動を「電気のスイッチを点ける」という概念のもとで記述することである。（*Velleman, 2015, pp.168-169*）。ヴェルマンの見解では、「われわれはつねに「何を為すべきか」に答えるという目的をもって行為の事前に心的行為を行っている」のではない。人が実践的推論を行っているということは特定の記述のもとで行為の意味を理解しているということであり、それで十分なのである。

（3） 筆者の主張

アルパリーらは、理由応答は関連する異なる態度間の論理的関係のゆえに生じる因果的な心的状態移行以上のものは必要としないと言う。まず、彼らは議論なしに理由応答を「過程」と想定している点に問題がある。さらに、理由に応じることの説明として、これで十分な説明になっているか、という疑問がある。理由のために何かを行ったと言えるには、理由となることがらを理由として理解している必要があるように思われる。たとえそれが論理的関

係のゆえに生じるのだとしても、しかじかの状態が行為者に因果的に生じたというだけでは、理由のために行っていると言うのに不十分ではないか。

推論を心的行為として捉える論者はこの点を重視する。P. ボゴシアンは、推論はすべて自発的な心的行為であると述べる (Boghossian, 2014, p.2)。なぜなら、「推論はわれわれが行う何かであり、たんにわれわれに生じることではない。それは[...] 目的をもって行われる何かである」からだ (ibid., p.5)。彼の考えでは、この点を捉えるために、推論の理論は「見做し条件 (Taking Condition)」に適合しなければならない。それは「推論は必然的に、思考者が自分の前提が自分の結論を支持すると見做しており、その事実のゆえに結論を引き出すということを含む」という条件である (ibid.) [強調は原著者]。

アルパリーらは「見做し条件」に適合する説明を与えていないように思われる。「見做し条件」は推論の理論が満たすべきものとして与えられているが、理由応答の説明一般は行為者が理由と見做して行為することを説明する必要があるため、少なくともこれに類する条件を認めるべきだろう。だが、ボゴシアンは見做し条件を「推論はたんに生じるのではなくわれわれが行うことだ」という点を捉えるために導入しているので、見做し条件を認めることで、理由応答・推論は心的行為であるという見解を認めることになり見える。そうすると、無限後退の問題に陥るよう思われる。しかし、ボゴシアンが行うように「たんにわれわれに生じる」ことではないことから「理由応答・推論は心的行為だ」ということをただちに導くことは、できない。たとえば、「これは人助けだ」という信念は行為ではないが、それは行為者によって信じられていることであり、たんに行為者に生じるものとしてではなく、行為者に帰属する。「前提が結論を支持すると見做す」ことを行為と捉える必要はないだろう。したがって、理由応答・推論の理論は見做し条件に適合する必要があるということは、無限後退の問題に陥ることなしに認められる。そして、アルパリーらの見解は見做し条件に適合する説明を与えていないので、十分な説明ではない。

つぎに、ヴェルマンの見解をみてみよう。彼の見解は、実践的推論が行為の再記述、行為の理解と関わるということを指摘している点で重要であると思う。「何を為すべきか」という問いに答えるという側面にのみ注目すると、それは心的行為であると考えるほうに傾いてしまう。だが、ヴェルマンの見解は「記述を与え行為を理解している」という点を考察に含むことで、心的行為ではないものとしての実践的推論がどのようなものを把握する一つの道筋を示している。われわれは自分が何をしているのかを熟慮せずとも理解している。心的行為として行われなような実践的推論はこの理解の働きで

ある、と。このように考えることで、彼の見解は、アルパリーらの示す無限後退の問題を回避し、さらに、見做し条件が捉える行為者の状態を考慮に入れることができる。

とはいえ、彼の見解に欠落があるのは明らかだ。彼の説明で実践的推論の説明が尽くされるとしよう。そうすると、第一に、ヴェルマンは行為の記述を与えるという側面のみを強調するため、その見解は、これだけでは推論の説明にはならないように思われる。見做し条件が示すように、推論は、前提と結論の間に成り立つ根拠づけの関係を理解したうえで結論を引き出すものだと考えられる^{vi}。前提が結論を根拠づけるという点を説明に含む必要がある。この問題から派生して、第二に、彼の見解は、実践的推論の「為すべき行為を導く」という役割に説明を与えていない。この役割にも説明は与えるべきだろう。この役割は、前提が結論を為すべきものとして支持するということによって説明される。以上の問題から、「前提が結論を根拠づける」という実践的推論の側面をヴェルマンの見解に含むべきである。つまり、冒頭で述べたような非心的側面をこの見解に含む必要がある。

では、この側面とはどのようなものだろうか。それは、ある行為と別の行為を結ぶ関係、つまり目的-手段、全体-部分の関係（計算的（calculative）関係）を表す命題の構造だと考えられてきた（Anscombe, 1957; Schwenkler, 2015; Vogler, 2002）。目的-手段関係は、たとえば、風邪を治すこととネギを巻くことの関係で、全体-部分関係は、道路を渡りきることとそのための第一歩の関係である^{vii}。例を用いて説明したい。ある人は「風邪を治す」ために以下のような計算的構造にもとづいて行為を導く。

（目的・大前提）私の風邪が治る

（前提）血流がよくなるならば、私の風邪が治る

（前提）私が首にネギを巻くならば、血流がよくなる

（結論）私は首にネギを巻く

この例では、目的の観点から、「首にネギを巻く」べきである。諸命題が計算的構造を形成するとき、前提はその行為を支持し、結論は前提の観点から「為すべき行為」として示される。一方で、計算的関係を表さないような命題（例：「ネギは美味しい」）は、「ネギを巻く」という行為を支持する根拠ではない。この構造に現れないがゆえに、当該の命題は根拠、理由として分節化されないのである。行為においてある命題が前提となり結論を根拠づけるためには、計算的構造を形成する必要がある。

さらに、計算的関係を表す命題の構造は、前提が結論を根拠づけ、結論を導出するための構造であると同時に、ヴェルマンが重視する「行為の再記述」

を支える構造でもある(Anscombe, 1957, pp.46-47; 88-89 頁). これらの命題が、前提が根拠となり為すべき行為を結論づける計算的構造を形成しないのであれば、当該の行為に対して「風邪を治す」という目的による記述も与えられない。「ネギは美味しい」という命題は、与えられた情報のかぎりでは、他の命題と記述を繋ぐ関係を持たないため、当該の行為に「風邪を治す」行為としての記述を与えることはできない。一般化すれば、根拠、理由をもちだして目的から行為を再記述することが可能であるのは、計算的構造で諸命題が前提・結論として働く場合のみである。

この計算的構造を考慮に置いて、ヴェルマンの見解を修正するなら、どのようになるだろうか。先に、推論のポイントは「前提と結論の間に成り立つ根拠づけの関係を理解したうえで」結論を引き出すことにあると述べた。ヴェルマンの見解にこの点を含めると、実践的推論は、前提と結論の間になりつつ根拠づけの繋がりを理解して、目的の観点から行為に記述を与えていることである、ということになる。そして、いま見たところでは、その繋がりは、計算的構造である。実践的推論は、特定の記述を受ける行為に関してそれがどのような計算的構造からその記述を与えられるのかを理解しているということである。このように言うことは、行為者が「根拠」といった概念を用いて前提と結論の繋がりを把握していなければならないということではない。たとえば、最初の事例の人物は、「なぜ？」と問われれば、「人助けになるから」と答え、「それが結論の根拠である」とは言わないかもしれない。しかし、鴻(2014)で述べられるように、問われればそれを答えに提示するというその傾向性によって、「人助け」を当該の行為の根拠として理解し、それゆえに行為していると行為者は示している。理由として持ち出すという傾向性を有していれば、根拠として理解していると言うのに十分である。

「為すべき行為を示すという役割」に関して言えば、計算的構造は再記述を支える構造であると同時に、目的、その他の前提の観点から為すべき行為を示す構造であるため、行為の記述間の繋がりを理解していることは、その行為を為すべきポイントを理解しているということである。実践的推論が「何を為すべきか」という問いに答えるという側面をもつと認めたとしても、それが心的行為であると言わねばならないわけではない。

以上から「あることがらが行為のための理由であるのは、実践的推論の前提として働く場合のみであるか？」という問いに、筆者は、非心的側面と心的側面の両方から、肯定的に答えたいと思う。われわれが理由のために行為するとき、その理由は、計算的構造にもとづいて、行為を支持するものとして分節化される。そして、目的の観点からの記述は、計算的構造によって可

能になっている。したがって、非心的側面から、当該の問いに肯定的に答えることができる。心的側面に関して、実践的推論を熟慮としてのみ理解すると、当該の見解は無限後退の問題に陥る。しかし、それを行為だと考える必要はない。行為を前提の観点から理解していることであると考えられる。ヴェルマンが注目した通り、理由のために行為している人は、目的によって行為を再記述しているはずである。そのかぎりでは、行為者はその根拠づけの関係を理解してその行為を引き出している。したがって、心的側面からも、当該の問いに肯定的に答えることができる。

(4) 今後の展望

(3)節の見解を展開し、「では、その理解とは？」と問うことが必要であるのは明らかである。しかし、ここでは、これをメタ倫理学の議論にどう応用できるかということを考えたい。(3)節では、行為を説明する理由(動機理由)を主題にしていたが、行為を正当化する理由(規範理由)について考察するために用いることができる。メタ倫理学では、規範理由の源泉をめぐって、二つの立場が対立している。その立場とは、内在主義(internalism)と外在主義(externalism)である。B.ウィリアムズによって提唱された内在主義には、規範理由は健全な熟慮の経路に現れるという洞察がある(Williams, 2001)。この洞察は、内在主義を直接的に支持するものではなくても、規範理由を考えるうえで重要な示唆であり、前提を加えれば、内在主義を支持する。本稿の見解から、規範理由に二つの仕方アプローチすることができる。

第一に、「熟慮の経路」を本稿で述べた非心的な実践的推論として理解する道がある。つまり、規範理由は実践的推論の前提に現れると考える道がある。C.フォークラーは、これに加えて、規範理由は行為者相対的であると考え、積極的に内在主義を支持する(Vogler, 2002. ch.8)。

第二に、心的側面として理解し、それ自体の積極的な役割を主張する道がある。C.コースガードによれば、熟慮は、理由を与えるような実践的アイデンティティを統一し、その行為者の全一性を保つという役割を果たす(Korsgaard, 2009, pp.125-126)。彼女の見解は、熟慮、理由、行為者性の間の連関を示唆しており、検討の価値のある道筋を示している。

-
- i アンスコムはさらなる目的を目指した「意図を伴う」行為に限定して主張している。本稿でも「行為」は以下そのようなものだと理解してほしい。
 - ii 「命題的構造」という用語は Audi (2006, pp.86-87) に負っている。それは、妥当あるいは妥当でないとして論理的に評価する際にわれわれが言及す

- るような、抽象的な命題の構造である (ibid.) .
- iii 「記述の有する秩序」については(3)節で説明する.
- iv 本稿の範囲では、「自発的」をその行為者がなんらかの目的を理由として了解していることを含むものとして用いる. そう読まなければ, アルパリーらの無限後退を示す論証は成り立たないように思われるからである.
- v 以前の著作によれば, 行為が意味をなす (make sense) とは, それを理解できる (understand) ということである (e.g. Velleman, 1989, p.182) .
- vi このことを言いあらわし, アンスコムは「[ある命題から別の命題が帰結するということ] そのことが分かる (seeing) という以外に, 実際に推論をしている (inferring) ということが意味することが何か他にあるだろうか. 私は, ないと思う」と述べる (Anscombe, 1989, p.112; 196 頁) .
- vii 「計算的關係」という用語は, Vogler (2002) に負う. 「によって關係」と同様のものである. その關係を表す命題的構造を「計算的構造」と呼ぶ.

(慶應義塾大学)

(5) 参考文献

- Anscombe, G. E. M. (1957). *Intention*. Harvard University Press. [菅豊彦訳(1984). 『インテンション』, 産業図書.]
- (1989), [2005]. “Practical Inference”. in *Human Life, Action and Ethics*. Imprint Academic: pp. 109-148. [門脇俊介・野矢茂樹監訳 (2010). 「実践的推論」, 『自由と行為の哲学』, 春秋社.]
- Arpaly, N. & Schroeder, T. (2012). “Deliberation and Acting for Reasons”. in *Philosophical Review* 121(2): pp. 209-239.
- Audi, Robert (2006). *Practical Reasoning and Ethical Decision*. Routledge.
- Boghossian, Paul (2014). “What is inference?” in *Philosophical Studies* 169 (1): pp. 1-18.
- Davidson, Donald (1963). “Actions, Reasons, and Causes”, in *Essays on Actions and Events*. Oxford University Press. [服部裕幸・柴田正良訳 (1990). 「行為・理由・原因」, 『行為と出来事』, 勁草書房.]
- Korsgaard, Christine M (2009). *Self-Constitution: Agency, Identity, and Integrity*. Oxford University Press.
- Schwenkler, John (2015). “Understanding 'Practical Knowledge'”. in

Philosophers' Imprint 15.

Velleman, David (1989). *Practical Reflection*. Princeton University Press.

—— (2015). “Time for Action”. in *Time and the Philosophy of Action*.
Routledge.

Vogler, Candace A (2002). *Reasonably Vicious*. Harvard University Press.

Williams, Bernard (2001). “Postscript” in *Varieties of Practical Reasoning*,
Elijah Millgram (ed.). MIT Press: pp.91-97.

鴻浩介(2014). 「実践的推論の二つの位相」, 『哲学の探求』(41):27-48 頁